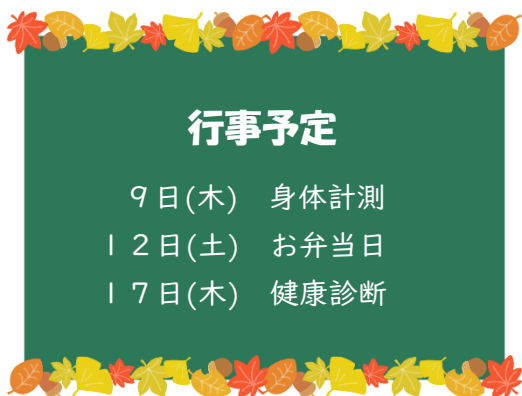





公園の落ち葉が赤や黄、オレンジへと姿を変え、お散歩が一段と楽しい季節になりました。子どもたちは、毎日の自然の中での外遊びをととても楽しみにしています。

先日は「運動会ごっこ」にご参加くださりましてありがとうございました。後日、ノートや登園時に沢山のねぎらいのお言葉を頂きまして、感謝申し上げます。子どもたち、保護者の皆様の笑顔につながったのなら、何よりです。また、当日は水道工事の関係で、駐車場や音響等、皆様には大変ご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありませんでした。ご理解、ご協力いただきまして、ありがとうございました。



行事予定

- 9日(木) 身体計測
- 12日(土) お弁当日
- 17日(木) 健康診断



お弁当日は
12日(土)です。

食べきれぬ量のお弁当と、食具を持たせてください。飲み物とおやつは園で準備します。



お願い

これから寒くなり、厚着をしがちですが、子どもたちは遊び始め体を動かすとすぐに体温が上がり、着ている服によっては、汗をかきやすくなります。できるだけ薄着を心がけ、素材は、汗を吸収しやすいものを選びましょう。



また、これからの季節、よく着用する物の中にフード付きの物があると思います。これは、危険ですので園での着用を控えてください。子どもは遊んでいると、夢中になってしまうものです。そのため、思いもよらぬ突起にフードが引っかかり、窒息する恐れがあります。また、友だちに引っ張られ転倒につながることも考えられるなど、思わぬ事故をおこすことがあります。

これからも、子どもたちが安全に、毎日を笑顔で過ごせるよう、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



新しい職員の紹介

やない ひさこ
(パート保育士)

よろしくおねがいします！

お昼寝用のフランク ケットをご準備ください！

日中の気温も下がり始めています。お昼寝用のタオルケットを綿毛布やブランケットに変更していただくと助かります！



対話による子どもの育ち(2)

キッドワールド総合園長 牧野 桂一

前回お話ししましたように「イヤイヤ期」の2歳の子どもであっても、「僕、人参嫌いな」と言ったときに、「ああ、人参嫌いなんだ」というように、子どもの言うことよりも少しゆっくりと、優しく小さい声で返してあげると、子どもは、その人に自分が受け止められているように感じます。すると、この期の子どもは、満足し、すごく偉そうにします。そして、「僕、嫌いな」なんて威張って言ったりするのです。そこで回りの大人が、「威張ってる場合じゃないでしょう、だめ、ちゃんと食べなさい」などと押しつけ的に言うと子どもは反発してしまいます。そうではなくて、「僕、嫌いな」という言葉をきちんと受け止めて、「でもね」と優しく切り返していく



ことが必要です。そのように自分が受け止めてもらえる対話的な人間関係の中で育っていくと、子どもの中に、周りの大人から受け止められ、丁寧に優しく返してもらったことが、社会的な知性、あるいは社会的な自己として育っていくことになります。このことを心理学的には「第二の自我」というように言っています。これが、2歳の頃から育ち始めて、3、4歳頃までに、子ども自身のものになっていきます。そして4、5歳頃になると、この二つの自我の世界を子ども自身の中で繋げて対話できるようになってくるのです。

そうは言うものの、4歳の子が、自分の内面について深く考えるということは、簡単にはできるものではありません。子どもたちの中に、心地よく折り合いを付けながら、この二つの自我がつながる世界を創っていくことが私たち大人の役割になります。それを保育の場では、保育計画として立てて、長期的に取り組んでいます。

その保育計画では、子どもたちの家庭での育ちをきちんと受け止めるために、3歳までの未満児では、一人一人との関わりに重点を置いた個別の保育計画を立てて取り組んでいます。また、3歳以上の以上児においては、一人一人の子どもの中に「自我の世界」と「第二の自我の世界」という二つの世界を繋げていくために自己の内部で対話ができる力を育てています。そのために保育計画の中には、三つの大切なことを取り入れています。

その一つ目は、探究心を育てることです。自我というのは自己主張という言葉に置き換えられますが、これが3歳過ぎてくると、物事を「面白いな」とか「不思議だな」というふうに考える探求的に知性が育っていきます。0歳の頃に育つ、ものに対するこだわりやものを手に入れたいという願望が、この自我の世界の根っこにあります。それが3歳過ぎる頃から、ものを不思議に思う気持ちやものを面白いがる気持ち、科学する気持ちに育っていくのです。例えばダンゴムシ捕まえたら「ダンゴムシは面白いな」とか、沢蟹を捕まえたら「カニッコは強いな」とか、泥団子を作る子どもは「泥団子がピカピカ光り出したぞ」とかと思って、必死に知恵を出して環境と向き合う刺激的な心を育てるのです。





次に、第二の自我です。これは共感的知性という言葉で表現されます。大好きな大人が大事ということから始まって、その人の背後にある文化との交流・対話へと発展していきます。本の世界、歌の世界、踊りの世界などの文化の中に込められた大人の願いを子どもが、自分の中に取り込んでいくことです。

三つ目は想像力です。4歳から5歳の子どもの未来をつくり出していく力、今は存在しない未来を創り、それを仲間と共有していく力です。「僕はこれが面白い」という世界が共同的な活動の中で仲間と一緒に「面白い」という世界に広がっていくことです。仲間と一緒に活動することが、この2つの世界をつなげ、子どもたちの生活を変えていくのです。保育では、そのようなことを対話的に展開していきます。子どもが自分のやりたいことを聞いてもらう権利を保障されながら、それを「私たちの世界」へとつなげてもらう。そうすると仲間の中で誇らしく生きる子どもが育っていくのです。



このような丁寧な子どもの見守りが、子どもたちが様々な人と楽しく平和的に共生していけるような生き方を育てることになり、「嘘をつかない」で、「人の話を誠実によく聞く」ことができ、「自分のしたことには責任を持ち」「相手に理解して貰えるように丁寧に説明する」ことができる力を育てていくことに繋がっていくのです。



「対話」の大切さが伝わってくるお話でした。

子どもにとって身近な存在である私たちが、一方的に話すのではなく、子どもの思いを受け止め、言葉にし、それに応えることが出来ているのか。子どもに、自分の思いや願いを強く押し付けていないか。今、目の前にいる子どもが、本当に望んでいるか、納得してくれているのかを読み取りながら、接することができるのか。そのことを改めて考えさせられました。「対話」の重要性を頭にいれ、子どもの思いに寄り添った言葉を返せるよう、しっかりと子どもと向き合っていきたいと思います。

